中務集注釈（九）

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
斎藤由紀子・曾和由記子・寶槻たまき

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集の注釈を試みる。本紀要五八号「中務集注釈（一）」以来、六三号「中務集注釈（六）」に至る六回において、中務集二類本、冷泉家時雨亭文庫蔵資経本二九八首の注釈の試み行い、加えて六四号「中務集注釈（七）」と六五号「中務集注釈（八）」において、資経本に収載されず、西本願寺蔵三十六人集、歌仙家集本および旧前田本のみに存在する歌の注釈を行った。

「中務集注釈（一）」と「中務集注釈（二）」は、研究会で問題となった歌を抜粋した注釈であったため、本号では、そこで省略した歌を改めて検討し、「中務集注釈（九）」として掲載した。補遺にあたるものであり、続きの補遺も次号で完結の予定である。

「中務集注釈（一）～（八）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げる。

各歌の文責を次に示す。二・三・四・五（加藤）、七・八・九・一〇（斎藤）、一四・一五・一六・一八・一九（曾和）、二二・二三・二四・二五・二六・二七（寶槻）、三〇・三三・三五・三六（高野瀬）

凡例

一　本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。

二　本文の校合に用いた本は、以下の通り（（　）内は、異同を掲出する際の略称）。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。
西本願寺本（西）
前田家旧蔵　現出光美術館蔵　伝西行筆本（前）
奈良女子大学蔵歌仙家集本（歌）

三　和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四　底本を校合本によって校訂した箇所は、［語釈］もしくは、［補説］に、その理由と共に明記した。

二番歌

石上

石上古き都を来て見れば昔かざしし花咲きにけり

［異同］　ふるきみやこ→ふるきわたり（西・前・歌）

［他出］　新古今・春上・八八（よみ人しらず）、和漢朗詠・巻下・五二九、三十六人撰・一四三、深窓秘抄・十五、清正・七

［語釈］　○石上　大和の国の歌枕。現在の奈良県天理市石上町。『万葉集』以来、近くの地名「布留」に続けて「石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君にあらなくに」（万葉・巻三・四二一　丹生王）のように詠まれることが多い。平安時代では、「布留」と同音の「古し」「降る」を導く例も見られる。当該歌においても、「古き」を導く。「石上古き都のほととぎす声ばかりこそ昔なりけれ」（古今・夏・一四四　素性）。○古き都　大和は、かつて平城京があったことから、このように言う。○昔かざしし　「かざす」は、花や草木を頭や冠に挿すこと。「ももしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる」（万葉・巻一〇・一八八三　作者未詳）。○花咲きにけり　「花」を具体的に限定することは難しいが、石上布留の桜を詠んだ例があり注意される。「石上布留の山辺の桜花植ゑけむ時を知る人ぞなき」（後撰・春中・四九　遍照）。

［通釈］　石上

ここ石上布留の古い都を来て見ると、昔の人々がかざしとして挿した花が咲いているよ。

［補説］　「石上布留」という地名に因んで、かつてこの地に都があった時代に思いを馳せた。一番歌から一〇番歌まで村上朝名所絵屏風歌として一群をなす。増田繁夫氏前掲論文（「中務集注釈（一）」（『日本女子大学紀要　文学部』第五八号、平二一）一番歌［語釈］参照）は、当該の歌群が『忠見集』『信明集』に見える名所絵屏風歌と同一の屏風について詠まれたものと推定する。『忠見集』『信明集』の名所絵屏風歌において「石上」は、次のように詠まれている。「春来ればまづぞうち見る石上めづらしげなき山田なれども」（忠見・三）、「年を経て言ひ古さるる石上名をだにかへて世を経てしがな」（信明・三〇）。

三番歌

伏見の里

桜花散りかふ空は暮れにけりふしみの里に宿や借らまし

［異同］　伏見のさと→ふしみ（西・前・歌）、さくらはな→梅花（歌）

［他出］　雲葉・一九八、夫木・春四・一四三四

［語釈］　○伏見の里　大和の国の伏見、現在の奈良市菅原町と、山城国の伏見、現在の京都市伏見区の二つがある。「いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」（古今・雑下・九八一　よみ人しらず）のように「菅原や伏見」と続けて詠まれているものは前者と見られるが、単独で「伏見」と詠まれているものについては、判断が難しい。山城の可能性も考えられる。当該歌の場合、「伏見」に「臥し身」を掛ける。「名に立ちてふしみの里といふことはもみぢを床に敷けばなりけ

り」（後撰・雑四・一二九七　伊勢）。「臥し身」と「暮れ」「宿や借らまし」が響きあう。○散りかふ空　「散りかふ」は、あちこちに乱れて散る、散り乱れる。「桜花散りかひくもれ老ひらくの来むといふなる道まがふがに」（古今・賀・三四九　業平）。散る花が空を覆っていることと「暮れ」が照応する。○宿や借らまし　「まし」は、ためらいがちな意志。「秋の野に道もまどひぬまつ虫の声する方に宿や借らまし」（古今・秋上・二〇一　よみ人しらず）。

［通釈］　伏見の里

桜花が散り乱れる空は暮れてしまった。「臥し身」という伏見の里に宿を借りることにしようか。

［補説］　屏風の画面には、伏見の里に桜が散り乱れる様が描かれていたと見られる。『信明集』の名所絵屏風歌にも「伏見の里」を詠んだ歌が見え、「行く春にふしみの里と告げてしかあはまくほしみ立やとまると」（信明・三一）と伏見の里の晩春の景が詠まれている。当該歌と同様に「伏見」に「臥し身」を掛けている。

四番歌

守山

人目のみもる山に住む呼子鳥忍びにたれを待つ音鳴くらむ

［異同］　もるやまにすむ→もるやまになく（西・前・歌）、まつね→鳴音（歌）、なくらん→なるらん（西・前・歌）

［他出］　夫木・春五・一八一五

［語釈］　○守山　近江の国の歌枕、現在の滋賀県守山市付近とするのが通説だが、遠江（能因歌枕、五代集歌枕、八雲御抄）、上野（八雲御抄の一説）とする説もある。○人目のみもる山　「人目守る（人目が見守る、人目をはばかる）」意を掛ける。「人目のみもる山なりとかけはしの木の下陰は月も照らさじ」（道済・二五八）。○呼子鳥　人を呼ぶように鳴くことから名付けられたというが、その実態は不明。古今伝授の秘説「三鳥」の一つとして注目され、諸説が提示された。春の鳥として「呼ぶ」を掛けて詠まれることが多い。「我が宿の花にな鳴きそ呼子鳥呼ぶかひありて君もこなくに」（後撰・春中・七九　春道列樹）。当該歌でも「呼ぶ」意を込めている。○たれを待つ音鳴くらむ　「音鳴く」は、声を立てて鳴く。呼子鳥の声を聞いて、ひそかに誰を待って鳴いているのか、と推量した。他本の「なるらん」によると、ひそかに誰を待っている声なのであろうか、の意となる。

［通釈］　守山

人目をひどくはばかるという名の守る山に住む呼子鳥は、ひそかに誰を待って声を立てて鳴いているのだろうか。

［補説］　『能宣集』に、次のような当該歌に類似した歌がある。「もる山にて呼子鳥の鳴き侍るを／人目のみもる山に鳴く呼子鳥しのびに誰かあひこたふらむ」（能宣・二五四）。

五番歌

須磨の関

藻塩焼く煙になるる須磨の海人は秋立つ霧を分かずやあるらむ

［異同］　すまのせき→すま（西・前・歌）、けふりになる、→けふりに

なれし（西）、きりを→きりも（西・前・歌）、あるらむ→ありけむ（西）

［他出］　拾遺・雑秋・一〇九六（よみ人しらず）

［語釈］　○須磨の関　摂津の国と播磨の国の境。○藻塩焼く煙　海藻に海水を注いで焼き、それを水に溶かして煮詰め塩を製する、その煙。「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（古今・恋四・七〇八　よみ人しらず）。○秋立つ霧　秋が立ち、立つ霧の意。「川風の涼しくもあるかうち寄する波とともにや秋は立つらむ」（古今・秋上・一七〇　貫之）。

［通釈］　須磨の関

藻塩を焼く煙に慣れている須磨の海人は、秋になって立つ霧を見分けられないでいることであろうか。

［補説］　藻塩の煙に慣れた海人は、煙と秋霧が紛れて区別できない、秋の到来を感知できないのではないかと詠んだ。「寛平御時きさいの宮歌合に／浦近く立つ秋霧は藻塩焼く煙とのみぞ見えわたりける」（後撰・秋中・二七三　よみ人しらず）は、浦近くに立つ秋霧を藻塩の煙と見た歌だが、当該歌はこれを踏まえるか。

七番歌

佐保山

初雁の夜深かりつる声により今朝佐保山ぞ思ひやらるる

［異同］　よふかゝりつる→よふかゝりける（西）、さほやまそ→さほやまの（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○今朝佐保山ぞ思ひやらるる　佐保山は大和国の歌枕。紅葉が代表的な景物とされ、当該歌も「天河かりぞとわたるさほ山のもみぢはむべも色づきにけり」（後撰・秋下・三六六　よみ人しらず）のように、雁の訪れを通じて秋の到来を知り、紅葉に染まる佐保山が想起されたことを詠んだもの。

［通釈］　佐保山

その年初めて訪れる雁の、まだ夜更けの声によって、今朝は、佐保山に自然と思いを馳せてしまう。

八番歌

勿来の関

陸奥の勿来の関に塞きけりと聞く聞くも猶越えぬべきかな

［異同］　せきけりと→きゝつれと（西）きにけりと（前）きにけれと（歌）、聞／／もなを→なき／／なをも（西）きく／／なをも（前・歌）

［他出］　なし

［語釈］　○勿来の関に　常陸国との国境に位置した、陸奥国の歌枕。「な来そ」すなわち「来るな」を連想させる用法がほとんどである。『蜻蛉日記』道綱母の詠「越えわぶる逢坂よりも音に聞く勿来をかたき関と知らなむ」のようにしばしば男女の仲を暗示し、当該歌も名所屏風詠を恋の情趣によって彩る。○塞きけりと　下句の「越ゆ」と対になっている。諸本異同があるが、他本本文はその点で整合性がない。

［通釈］　勿来の関

陸奥の勿来の関の名のごとく「来るな」とさえぎったと聞いていな

がら、それでもそこを越えてしまいそうなことです。

九番歌

飛鳥川

定めなき名には立てれど飛鳥川はやく渡りし瀬にこそありけれ

［異同］　関に―せに（西・前・歌）

［他出］　新古今・雑中・一六五七

［語釈］　○定めなき名には立てれど飛鳥川　古都飛鳥を代表する川として『万葉集』以来詠まれ「昨日といひ今日とくらしてあすかがわながれてはやき月日なりけり」（古今・冬・三四一　春道列樹）に代表されるように、その流れの変化に従い、絶えず変わる淵瀬と、流れの速さに時の流れを重ねて、無常を託す歌枕として詠まれ続けた。○はやく渡りし瀬にこそありけれ　底本は「関」。他本により「瀬」と改めた。「はやく」は昔、の意。「瀬」と時の流れの速さの意を掛けるか。淵瀬が変わる飛鳥川であるが、以前渡った瀬を再び渡ることになった、そこに流れた時間への感慨を述べる。「瀬を渡る」ことは女性に通うことを暗示する歌句で、八番歌同様恋の情趣が漂う。

［通釈］　飛鳥川

淵瀬が変わり定まらないものとして名高いけれど、飛鳥川の瀬の「速く」ではないが、ここは昔渡った瀬であることよ。

十番歌

浮島

頼まれぬ心からにや浮島にたち寄る浪のとまらざるらん

［異同］　うきしまに→うきしまの（歌）（前田家本「の」にミセケチ「に」と訂す。）

［他出］　なし

［語釈］　○浮島　陸奥の歌枕と考えられていたが、所在は現在の宮城県多賀城市とも同塩釜市の浦の島ともいい、確定しない。「定めなき人の心にくらぶればただ浮島は名のみなりけり」（拾遺・雑恋・一二四九　順）のように、特に恋歌において浮薄な人の心や不安定な状態などの比喩として詠まれている。当該歌は浮島を女性として擬人化したものとして解した。○立ち寄る浪　「あひしりて侍りける人を、ひさしうとはずしてまかりたりければ、かどより返しつかはしけるに／住吉の松にたちよる白浪のかへるをりにやねはなかるらむ」（後撰・恋二・六六一　忠岑）

［通釈］　浮島

頼みにできない浮ついた心のせいでしょうか。浮島に立っては寄せて来る浪は留まることがないでしょう。

十四番歌

春風

氷解く風の音せし朝より声まさりにき山川の滝

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○春風　春に吹く風。花を散らすもの、また花や花の香りを運ぶものとして詠まれる例や、春風を「東風」と解し、『礼記』月令の「東風解凍」を踏まえて氷を解かすと詠む歌も多い。同時代では、「麗景殿女御歌合」に「春風」題が見える。「春風／山川のみかさまされり春風に谷の氷はとけにけらしも」（麗景殿女御歌合・三）。○氷解く風　『礼記』月令の「東風解凍」を踏まえた表現。「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」（古今・春・一　貫之）。○声まさりにき山川の滝　春風によって氷が解け、滝の水音が大きくなったことをいう。春風が吹いた音と、流れ出した水音によって春の到来を詠んでいる。「山川」は山間を流れる川の意。「氷とく春たちくらしみ吉野の野よしのの滝のこゑまさるなり」（寛平御時中宮歌合・五）。

［通釈］春風

氷を解かす春風の音がした朝から、山間を流れる川の滝の音が大きくなったことだ。

［補説］当該歌から十九番までは、「正月、山里にて十二首」の詞書で始まる十一番から二一番に所収された一続きの歌群である。『恵慶集』に、中務の居る山里を訪ね、この歌群を見て同じ題で詠んだ歌群がある。詳細は「中務集注釈（一）」の十一番歌［補説①］参照。

十五番歌

梅花

山里にをり見つれども梅の花ほかにかはらぬにほひなりけり

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○をり見つ　「をり」は「居り」と「折り」の掛詞。「わがやどの桜の色はうすくとも花のさかりはきてもをらなむ」（後撰・春中・七七　よみ人しらず）。○ほかにかはらぬ　「ほか」は山里の外、都を指す。山里と都との対比。「ふるさとと思ひなわびそ桜花ほかの色にもおとらざりけり」（京極御息所歌合・十四）。○にほひ　鮮やかに映えて見える色合い。古くは、赤を基調とする色合いについていった。そのものから発する色合いや、光を受けてはえる色、また染色の色合いなどさまざまな場合にもいう。一方、現代に通ずる香りを表す場合も上代から見られる。「春たてど花もにほはぬ山ざとはもの憂かる音に鶯ぞなく」（古今・春・十五　在原棟梁）。

［通釈］梅花

梅の花は、山里に居て、手折って見たけれども、都と変わらない美しい色でしたよ。

十六番歌

山桜

咲けば散る咲かねば恋し山桜おもひたえせぬ花の上かな

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］拾遺抄・春・二二、拾遺・春・三六、三十六人撰・一四九、宝物・二九五

［語釈］○「咲けば散る～」で始まる初句は、前時代や同時代では例が少なく、中務以前では次の貫之歌のみである。「咲けば散るものと思ひし紅はなみだの河の色にぞりける」（貫之・六二八）。後代になると、当該歌を踏まえる歌も詠まれている。「咲けば散る咲かねばまたる山桜人のなげきの花にぞありける」（東撰和歌六帖・二一九　藤原基泰）。○花の上　「上」は「～についてのこと」「～に関すること」の意。「秋深み籬におゆる菊みれば花のうへともおもほえぬかな」（元輔・一三五）。

［通釈］山桜

山桜は、咲けば散ってしまうのが気がかりだし、咲かなければ早く咲いて欲しいと恋しく思われる。どちらにせよ、絶えることのない花への思いであることだ。

［補説］当該歌の他出である『拾遺集』三六番の詞書には、「子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこもりて」とある。このことから、当該歌は、子を亡くした後の山里籠もりで詠まれたと考えられる。詳細は「中務集注釈（一）」十一番歌［補説②］参照。

十七番歌

岸柳

いととくぞ色つきにける青柳のめにまづ春のみゆるなるべし

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○岸柳　「岸柳」題は先行例が見出せない。近いものとしては次の伊勢大輔の歌がある。「東三条にて、舟にのりて御堂にまゐりたりしに、岸の柳を／青柳のいとをつなでに引く舟は岸ちかくこそ寄らまほしけれ」（伊勢大輔・一一九）。後代では多くの用例が見られる。○いととくぞ　「いととくぞ」という表現は他例が確認できない。「いと（糸）、とく（解く）」を響かせているか。○めにまづ　「め」は「目」と「芽」の掛詞。「いにしへのかたみにつめる若菜ゆゑ見るこのめにもみつ涙かな」（定頼・一三一）。○みゆるなるべし　中務以前に例が見られない。使用例も少ない表現。「みどりなる松にかかれる藤なればむらごの糸とみゆるなるべし」（相模・三三五）。

［通釈］岸の柳

いち早く色づいたことだよ。青柳の芽に、真っ先に春の訪れが見えるのでしょう。

十八番歌

をかの松

片岡の松の上なる白雪は年ふる人の身にこそありけれ

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○をかの松　他例が確認できない題。「高砂の松」、あるいは漢語「松台」から着想を得た題か。「（高砂の松／いたづらにわが身もすぎぬ高砂の尾の上にたてる松ひとりかは）（能因・二三五）。○片岡　一方が急で一方がなだらかになっている丘。または孤立した丘。平安朝において「片岡」を詠む例は多数あり、特定の季節や景物と結びつくことなく、その時々の景物と共に詠まれている。「片岡の子の日の小松雪間より心ことにぞけふは引きつる」（元真・一八三）。

［通釈］をかの松

片岡の松の上に積もった白雪は、まさに頭の白い年老いた我が身であったことだ。

十九番歌

旅寝が草の枕

旅寝する草の枕も枯れにけり生ひけりやとも雪間をぞ待つ

［異同］（資経本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○草の枕　平安期以降は、枕詞から転じ、歌語として草を結んだ枕の意で旅や旅寝そのものを意味し、旅の侘びしさを含意することが多い。「夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまた旅寝ぬ」（古今・羇旅・四一六　躬恒）。○雪間　積雪の消えている所。雪の降らない間。当該歌では前者の意。「春日野の雪間を分けて生ひ出くる草のはつかに見えし君はも」（古今・恋一・四七八　忠岑）。

［通釈］旅寝の草枕

旅寝するための草の枕も枯れてしまった。もう新芽が生えてきただろうかと、雪の間を待っているよ。

二二番歌

屏風　子の日

野辺に出でて今日引きつれば時わかぬ松の末にも春は来にけり

［異同］屏風　ねのひ→中務のきみの子日（西）ねのひ（前）子日（歌）、ときわかぬ→時は□□（西）

［他出］風雅・春上・一一

［語釈］○子の日　正月の年中行事。○今日引きつれば　子の日の今日小松を引いたので、の意。○時わかぬ松　季節を知らない松。常緑樹である松は季節の移ろいを解さないことをいう。「時わかぬ松の緑も限なきおもひには猶色やもゆらん」（後撰・恋四・八三五　よみ人しらず）。○松の末　「末」は枝先の意。松は常緑樹なので季節によって色を変えることはないが、子の日に摘むことで松の枝先にも春の訪れを見出して

いる。「水のおもに風高からし岸の上の松のすゑまでかかる藤波」（能宣・一一〇）。

［通釈］ 屏風　子の日

野辺に出て、子の日の今日小松を引いたので、季節の移ろいを知らない松の枝先にも春はやって来たことだ。

二三番歌

花見てゐたる家

野も山も見るべきものを我が宿の花を眺めて日は暮れにけり

［異同］ 花みてゐたる家→いへのはなをみるところ（西）いへのはなみるところ（前・歌）、野も山も→のやまのも（西・前）野山にも（歌）、日はくれにけり→日をはくらしつ（歌）

［他出］ 万代・春下・三〇七

［語釈］ ○花見てゐたる家　「花」は桜の花を指すか。人が花見をしている家。○野も山も見るべきものを　自分の家だけでなく、野の花も山の花も見るべきではあるが、の意。「花見にも行くべきものを青柳の糸手にかけて今日はくらしつ」（貫之・四八）。○我が宿の花　私の家の桜の花。「こと里もみな春なれどわがやどの桜にまさる花やなからん」（貫之・三五九）。

［通釈］ 人が花を見て座っている家

野や山の花も見るべきではあるが、家に咲いた花をしみじみと見つめていたら日は暮れてしまった。

二四番歌

藤の花見て春惜しみたる所を

藤の花咲くを見捨てて行く春はうしろめたくや思はざるらん

［異同］ 藤の花みて春をしみたる所を→ふちの花をみてはるをゝしむ所（西）はなをおしむところ（前）藤の花みる春おしむ所（歌）、おもはざる覧→おほえさるらん（前）

［他出］ 金葉初・春・一二九

［語釈］ ○藤の花見て春惜しみたる所を　藤の花を見て、春が終わるのを惜しんでいる場面を詠んだ歌。○藤の花　藤の花は春の終わりから初夏にかけて咲くため、春を偲ぶ花、夏の訪れを感じさせる花として詠まれる。「あかずして今日のくれなば藤の花かけてのみこそ春をしのばめ」（躬恒・三五一）。○咲くを見捨てて行く春　藤の花が咲くのを見たのに、そのまま過ぎ去っていく春の意。［補説］参照。○うしろめたくや思はざるらん　春を擬人化し、「うしろめたし」と詠む。

［通釈］ 藤の花を見て春を惜しんでいる所を詠んだ歌

藤の花が咲くのを見捨てて過ぎ去っていく春は、藤の花のことを気がかりには思わないのだろうか。

［補説］ 当該歌は、伊勢の「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里にすみやならへる」（古今・春上・三一　伊勢）を踏まえて詠まれたと考えられる。伊勢は雁が見捨てると詠んだのに対し、中務は季節自体を擬人化した点に工夫が見られる。

二五番歌

山里にほ郭公ととぎすを聞く

山里もまれになりけりほととぎすまたとも鳴かぬ声を待つかな

[異同] 山さとに郭公を聞→やまさとにほと丶きすなく（西）山さとのほと丶きすなく（前）山里にほと丶きすきく（歌）、山さとも→山さとに（前・歌）、まれになりけり→まれらなりけり（西）まれになきける（前）まれらなりける（歌）、またとも→まてとも（西）、まつかな→聞かな（前・歌）

[他出] なし

[語釈] ○山里もまれになりけり　これまでは沢山ほととぎすの声を聞くことができた山里でも、今では聞くことが希少になってしまった、の意。「此里にいかなる人か家ゐして山郭公絶えず聞くらん」（貫之・四四一）。○またとも鳴かぬ声を待つかな　稀になってしまったほととぎすの声を惜しみ、再び鳴くことのない今年最後の一声を待つ。「夜もすがら待ちつるものを郭公又とも鳴かで過ぎぬなるかな」（栄花・三九七赤染衛門）。

[通釈] 山里でほととぎすの声を聞く

山里でも聞くことは稀になったことだ。ほととぎすよ、再び鳴くことのない最後の一声を待つことだ。

二六番歌

田のほとりに狩りしたる

袖ひちて植ゑし春よりまもる田を誰かは知らでかりに来つらむ

[異同] 田のほとりに→たのなかに（歌）、かりしたる→かりしたり（西・前）かりしたる所（歌）

[他出] 金葉（初）・秋・三七五、金葉集（三）・秋・二九三

[語釈] ○田のほとりに狩りしたる　田の側で狩りをしている。○かりに来つらむ　「かり」に「刈り」と「狩り」の意を掛け、狩りをする人を批判する詠みぶりとなっている。「田のほとりに、かりする人あり／早苗とりおのがつくらぬ秋の田をかりにきぬとや田ぬしとがめむ」（恵慶・三四）。

[通釈] 田の側で狩りをしている

袖を濡らして植えた春から守っている田を、稲を刈るではないが、誰が知らずに狩りに来たのだろうか。

二七番歌

菊の綿して顔のごふ女あり

老ひにける身にはしるしもしら菊の露の名立てになりぬべきかな

[異同] 菊のわたしてかほのこふ女あり→九月九日きくのわたにおもてのこふ女（西）九月九日きくのわたにもてのこふおんなあり（歌）なか

月の九日きくにておもてのこひたる人あり（前）、身には→身をは（前）、露のなたて→花のなたて（前）

［他出］　なし

［語釈］　○菊の綿して顔のごふ女あり　九月八日に菊に綿を被せ、九日に露と香を染みこませた綿で体を拭うと老いを拭うことができるとされた。その菊の綿で顔を拭っている女を詠んだ歌。「九月九日老いたる女菊しておもてのごひたる／今日までに我をおもへば菊の上の露は千年の玉にざりける」（貫之・三二一）。○しるし　老いを拭う効果。「今日を見て後こそしらめ菊のはなきくにたがはぬしるしありとは」（順・二二一）。○しら菊の露　「しら」に「白」と「知らず」の意を掛ける。不老長寿を願う「菊」と「露」を詠む歌は多く見られる。「いかでなほ君が千年をきくの花をりつつ露にぬれんとぞ思ふ」（貫之・一九六）。○名立て　悪評がたつこと。「秋の野の花の名たてにをみなへしかりそめに見む人にをらるな」（伊勢・一八七）。

［通釈］　菊の綿で顔を拭う女がいる

老いてしまった我が身には効果もわからないので、きっと白菊の露の悪評になってしまうに違いないことだ。

三〇番歌

浜面に松多く立てり

浦近くなみ立つ松は色変へで世にすみのえに生ふるなりけり

［異同］　はまつらに→はまつら（歌）、たてり→おひたり（前）、浦ちかく→うらわかく（西）はまちかく（前）、すみのえに→すみのえの（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○浜面　浜に面しているところ。浜辺。「人人もろともにはまづらをまかるみちに」（後撰・三八七・詞書）。○なみ立つ　並び立つの意の「なみ立つ」に、「波立つ」を掛ける。「浦・波・住之江」は縁語。○色変へで　色を変えないで。松の常緑を言う。「世のなかに久しきものは雪のうちにもと色かへぬ松にざりける」（貫之・二七九）。○世にすみのえに　世に住むという名の住之江に、の意。地名「住之江」に「住む」の意を掛ける。住之江は、摂津国の古郡名。墨江とも。現在の大阪市住吉区、住之江区、阿倍野区、東住吉区、生野区及び堺市北部一帯の地域をいう。平安初期以降は「すみよし」と呼称される。「心にもあらでうき世にすみのえの岸とはなみにぬるる袖かな」（古今六帖・一六五九）。

［通釈］　浜辺に松が多く立っている

入り江近く波が立ち、並び立つ松は色を変えないで、世に住むという名の住之江の浦に生えるのであったよ。

［補説］　「浦近く」は、高名な「寛平御時后宮歌合」の秋・冬の歌において一首ずつに用いられた句で、その二首はともに勅撰集に採られて人口に膾炙した。

浦近くふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞ見る

（古今・冬・三二六　藤原興風）

浦近くたつ秋ぎりは藻塩やく煙とのみぞ見えわたりける

（後撰・秋中・二七三　よみ人しらず）

広く知られたがために、却って平安時代の用例は少ない句なのだが、伊勢と中務には使用が見られるのが興味深い。

浦近く波は立ちよるさざれ石のなかのおもひは知るや知らずや

（伊勢・四三四）

浦近く立ちつる春の霞ともやそしほがまのけぶりとぞみる

（西本願寺本中務・六一）

三三番歌

池にのぞきたる松の、藤の花掛かれり

君がためあだし心もなきものを池の藤波松越えにけり

［異同］　池→いけに（西・前・歌）、松の→松に（西・前・歌）、藤の花→ふち（西・前・歌）、君がため→きみをおもふ（西・前・歌）

［他出］　秋風・春下・一二四

［語釈］　○池にのぞきたる松　底本「池のぞきたる松の」。他本により「池に」と「に」を補う。「のぞく」は、間近に差し掛かる意。「この平張は川にのぞきてしたりければ、づぶりとおちいりぬ。」（大和物語・一四七段）。ここは、松が池に臨んで立ち、その枝が池上に張り出している情景。○あだし心　「あだ心」に同じ。誠実さのない心、浮気な心、の意。「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなむ」（古今・東歌・一〇九三　よみ人しらず）。○池の藤波松越えにけり　「藤波」は、藤の花房がなびくさまを波に例えた表現。「藤浪の花は盛りになりにけり平城のみやこを思ほすや君」（万葉・巻三・三三〇　大伴四綱）のように古くから使われている。ここは、池に張り出した松の枝に藤の花が掛かるさまを、波が松を越えたと言った。

［通釈］　池に臨んでいる松が、藤の花が掛かっている

あなたさまの御ために不誠実な心もないというのに、咲き誇る池の藤波は松を越えてしまったことですよ。

［補説］　三三番歌から始まる屏風歌の一首。「中務集注釈（一）」参照。

［語釈］に挙げた『古今集』一〇九三番は、愛の誓いを象徴する歌として知られ、下の句の「末の松山」は常套句となった。当該歌はそれを逆手に取って、「池のほとりの松に掛かる藤波」をユーモラスに詠んだ。ただし、この手法は「春のためあだし心のたれなれば松がえにしもかかる藤波」（貫之・三〇三）や「松がえにさきてかかれる藤浪を今は松山こすかとぞみる」（貫之・三二七）のような、貫之の屏風歌に学んだものであろう。

三五番歌

野に狩りしたる所

女郎花かりの宿りと言ひし間にあまたの秋は野辺に来にけり

［異同］　かりしたる所→かりしたり（西・前・歌）、やとりと→たよりと（西・歌）たよりを（前）、いひしまに→きゝしまに（西・前・歌）、あまたの秋はのへにきにけり→あまたのとしのあきはへにけり（西・前・歌）

［他出］　なし

［語釈］　○女郎花　秋の七草の一つ。山野に生え、枝の先端部に黄色の小さな花を密集して咲かせる。和歌では女性の喩えとして詠まれる。「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな」（古今・秋上・二二六　遍昭）。○かりの宿り　「かり」に「狩り」と「仮」を掛ける。狩りの折のかりそめの宿り、の意。「かりにのみ人のみゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける」（拾遺・秋・一六六　貫之）。○あまたの秋

多くの年の秋、の意か。

［通釈］　野で狩りをしているところ

女郎花よ、狩りの時のかりそめの宿りと言ったその間に、多年の秋は、この野辺に来てしまったことよ。

［補説］　当該歌は、他本に従えば、「女郎花かりのたよりと聞きし間にあまたの年の秋は経にけり」となるが、その場合、「女郎花」の歌で「かり」と「たより」が同時に詠み込まれるのは当該歌のみである。そこから「たより」は「かり」から「雁」を想起して起こった誤りである可能性も考えられる。また、この歌を他本に従って校訂し、「女郎花は、狩りの時のかりそめの便りを聞いていた間に、多くの年の秋を経てしまった」と、「女郎花」を主体に詠んだ歌として解釈することも不可能ではないが、屏風の場面としては「野に狩りしたる所」とあり、恐らくは狩りをする男性が描かれていたと思われる。

参考として貫之の屏風歌を見ると、「小鷹狩」と明示された歌に「秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花今夜ばかりの宿はかさなん」（貫之・一五）とあり、また、場面の詳細は不明ながら、「かりにとて我はきつれど女郎花見るに心ぞ思ひつきぬる」（拾遺・秋・一六五　貫之）ともあって、狩りをする男性の立場で詠まれた歌のほうが目立っている。

一方で、女郎花を詠む屏風歌として、「女郎花おほかる野に人狩りするに」という絵柄で「秋の野の花のなたてに女郎花かりそめにみむ人にをらるな」（伊勢・一八七）と詠まれているほか、貫之歌でも「女郎花うつろひがたになる時はかりにのみこそ人はみえけれ」（貫之・八二）という例もあるので、他本の形が誤りとも言い切れない。ここは底本に従って解釈した。

三六番歌

遣水のつらに菊咲いたり。男、文見てゐたり

ながれつつ影も見るべく水際なる菊に恋しき人はならなん

［異同］　さいたり→さけり（西・前・歌）、文みてゐたり→ふみかく（西・歌）ふみかくところ（前）、なかれつゝ→あかれつゝ（西）

［他出］　なし

［語釈］　○遣水のつらに菊咲いたり　「つら」は、ある物や場所に面したところ、傍ら。「咲い」はイ音便。遣水のほとりに植えられた菊が咲いている情景。○ながれつつ　「ながれ」は「流れ」と「泣かれ」を掛ける。「山高み下行く水の下にのみながれて恋ひむ恋ひは死ぬとも」（古今・恋一・四九四　よみ人しらず）。流れながら、自ずと泣きながら、の意。○影も見るべく　「影」はここでは姿の意。「ゆく年のをしくもあるかなます鏡見る影さへにくれぬと思へば」（古今・冬・三四二　貫之）。「見るべく」は、見ることができる、の意。「よそにのみこひやわたらむ白山のゆき見るべくもあらぬわが身は」（古今・離別・三八三　躬恒）。

［通釈］　遣水のほとりに菊が咲いている。男が手紙を見て座っている

流れながら、泣きながらも、その姿を見ることができるように、私の恋しい人は水際に咲く菊になってほしいものだ。

［補説］　底本と他本とでは、詞書の後半が異なる。底本では「男が（女からの）手紙をみて居る」のに対して、他本では「男、文書く」等、男のほうが女に恋文を書くのである。相手の冷淡さに泣き、「恋しい人が

水際に咲く菊であったなら遣水の流れとなってでも姿が見られるのに」と思っている、という歌の主旨からは、底本の詞書のほうが相応しいか。しかし、女につれなくされても諦められず、なおも恋文を書き続けている男が、その切ない心情を詠んだもの、と考えるならば、他本のように男が手紙を書く図柄としても不自然ではないであろう。

高野　晴代（日本女子大学教授）
高野瀬惠子（日本女子大学非常勤講師）
加藤　裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）
斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）
曾和由記子（日本女子大学学術研究員）
寳槻たまき（日本女子大学大学院博士課程後期在学）